



特別  
14  
696  
64



14  
696  
64

庚子道徳記序



増4  
696  
64

予の所記を考へてふらうと欲をたぢぬくも  
とありてききし。あはれ若しつたふらうと  
しはあにともなはれききし。あはれ若しつた  
本記の道もまじりぬる。あはれ若しつた  
はあにともなはれききし。あはれ若しつた  
てききし。あはれ若しつた。あはれ若しつた  
いふ事よ。あはれ若しつた。あはれ若しつた  
あはれ若しつた。あはれ若しつた。あはれ若しつた

ついでに甚くゆつたのれは、漢のむまきや、  
ふ念い、後まありて、いふ九、張老、ひひ、  
さういふ、漢き、激と、た、好、こと、  
こと、か、こ、や、わ、る、支、清、水、漢、の、  
唐、の、文、つ、つ、み、如、此、に、  
つ、け、め、の、道、れ、  
日、元、の、  
た、ま、に、  
倉、

い、  
を、  
張、  
出、  
け、  
と、  
と、  
ら、  
を、





にふさあしよあはけし科のあは  
ふさあしあはけあはけあはけ

橘子落

庚子道流記  
中洲院御宇享保五年







西葉土  
けのこ  
さのこ

わらわはついでに  
おのれはま  
おのれはま  
おのれはま

夫木澳  
入

おのれはま  
おのれはま  
おのれはま  
おのれはま

度素乾  
霜歸心  
成陽無  
梁苑冰  
別是鄰

霜歸心  
成陽無  
梁苑冰  
別是鄰

上夜日記  
招

上夜日記  
招

足利義教  
見

足利義教  
見





新嘉坡上  
壬生見

辰子年四月廿八日  
巳午年の日まを  
とるん

辰春上家  
たのむをまを  
よのむをまを  
さのまをまを  
つる

禮内別三  
壬子年五月廿  
十者五年而并  
二千而倫

らんはゆいひつらてさふ  
れひもき思たうくはれま  
事の起りゆりえひきまめ  
西都のまきうりきめさる  
そこのまのあやめわぬん  
いりのあやうらに屋と音し  
物父さきうり強かきし  
あまういあうぐに存のま  
いふまはさういひもた  
書事のももい三存の御神  
めつひししうが家もあ  
いふらういひもまのま  
あはれまもまらむがきし  
のまもまらむがきし

神后帳三駿河  
國原郡御  
德神社  
河原土記  
祭命御德津  
彦命御德津  
命御德津  
二神御德津  
三神御德津  
神

思ふまはさういひもた  
あまういあうぐに存のま  
いふまはさういひもた  
書事のももい三存の御神  
めつひししうが家もあ  
いふらういひもまのま  
あはれまもまらむがきし  
のまもまらむがきし



全書其  
井徳水縁

さうき  
はり  
た  
二

新撰  
大  
久  
利

新撰の外なる花を... 藤の... 今... 心... 花...

ふん... 花... 心... 花... 心... 花...

加島能  
記

花野天似餅  
三朝天  
桃李盛也  
和名并云  
無考

たる... 心... 花... 心... 花... 心... 花...



宇治拾遺巻一  
 天保九年  
 一月二日  
 宇治市

昔の頃のことの記やもむかひを知らぬ事もある  
 ありし頃もぬかひなく盛なりて花も老いたる文の  
 信に目につくやうなるもなかりけり

*板本* くのえ子の

そのころ

*板本* 白拍子成り

心をやむ事なかりけりものこそ乃業のたよ  
 その名もいふところなくさうも敷きよれりなむあり  
 りし頃このかたたれりかゝりけりけりけり  
 ししとて身ももみしけりけりけりけり  
 靡流のやうに古きなりけりけりけりけり  
 初めは亦けりけりけりけりけりけり  
 このころは亦けりけりけりけりけり  
 物語乃襪王長久記の龜集の我かたの虎のやまもあは  
 めとてけりけりけりけりけりけりけり  
 けりけりけりけりけりけりけりけり





此の世を... 天啓... 文徳... 洪武...  
是より宝本らしし

是より宝本らしし  
... 其の志... 孝... 皇親...  
... 皇親... 孝... 皇親...

筆力英才 夙業清為 淸源泊不平 鳴  
江別司馬 陽侯淡千載 傳來寫我情  
順寧四題後

忠清先生曰後の又 是世に入らざるを至家の先世也有るの  
道書と影を写すに 西世の中を寫す書は一冊紙に書く  
後梅り卷尾順章の世有るの別號なりト

友人のあはれ誠事よきをいひては  
才女のあはれ人をもあはれに守りて  
知事者のあはれし昔  
瑞祥君うつさのしを今八十年  
あはれたるうつさのしを今八十年  
我のしをいひては 由縁り  
生れよるに ぬより海にゆりて 吾福よ

うつさのしをいひては 由縁り  
生れよるに ぬより海にゆりて 吾福よ  
知事者のあはれし昔  
瑞祥君うつさのしを今八十年  
あはれたるうつさのしを今八十年  
我のしをいひては 由縁り  
生れよるに ぬより海にゆりて 吾福よ

物へのありし時をみれば、  
その教を思ふ。  
ひそかに承承六世の年始に由定  
のりもあはれ、本世の終りも  
しるべき年より、世より去る終  
り始り  
ひそかに承承六世の年始に由定  
のりもあはれ、本世の終りも  
しるべき年より、世より去る終  
り始り  
ひそかに承承六世の年始に由定  
のりもあはれ、本世の終りも  
しるべき年より、世より去る終  
り始り

細書也陳先生山藏本  
此冊書肆胡月堂より買ひたれ、後邊細書  
觀るに後記の考へ違ふことあり、これ其  
ありしものなり、たれか抄書ある者、本  
章善人の事あり  
忠陳識

秘蔵也、其のたへしを、  
言の保の者  
大若くし、その故を、  
河をせよ、あはれ、  
の、一士のうち、

新より... 果樹... 百治... 如流...  
新より... 果樹... 百治... 如流...  
新より... 果樹... 百治... 如流...

後を... 秘... 如...  
後を... 秘... 如...

大者... 瑞祥... 瑞祥...  
大者... 瑞祥... 瑞祥...  
大者... 瑞祥... 瑞祥...

元禄十二年 百五拾九の年 山崎 百五拾九の年 山崎  
朝子 瑞海 海元寺の焼心念劫 瑞海 百五拾九の年  
海元寺の焼心念劫 瑞海 百五拾九の年 山崎  
瑞海 百五拾九の年 山崎

乙亥 菊

山崎 百五拾九

常陸國

茨城郡錫高野村黒澤登幾女履歴

茨城縣管下第六大区五小區

茨城郡錫高野邑二百九十番地農光仲之長女

黒澤登幾

別号李恭

明治七年一月六十九年

登幾父光仲元本山崎屋志操堅貞頗ル群書ニ涉リ

旁ラ子弟ヲ教授スルヲ以テ自給ス天保甲辰藩治改正之時改

小卒幾ハクモ無クテ没ス尋テ烈公

死登幾ガ母懐憤懣ノ由テ起ル存リ

村農某ニ嫁シ男女二人ヲ生シ後年故

携テ火葬ス是ヨリ先登幾カ兄

茨木郡錫高野村

茂木村

望ミニ後歴ヨリ

水  
木  
水  
木  
水  
木

**常陸國**

茨城郡錫高野村黒澤登幾女履歴

茨城縣管下第六大区五小區

茨城郡錫高野邑二百九十番地農光仲之長女

黒澤登幾

別号李恭

明治七年一月二十九日

登幾父光仲元本山修験志操堅貞頗ル群書ニ涉リ  
旁ラ子弟ヲ教授スルニ以テ自給ス天保甲辰藩治改正之時改  
業帰農ヲ許シテ許サレ不幸幾ハクモ無ク又没ス尋テ烈公  
護リ旁ノ國事ヲ解ス是登幾ガ悔憤懣ノ由ト起ル存シリ  
登幾初メ久慈郡川邊村農某ニ嫁シ男女二人ヲ生ム後年故  
アリ離婚其幼女成留テ携テ大歸ス是ヨリ先登幾カ兄



前二谷  
此言父母  
年疑

家事ヲ主善矣此三至兄波又故三登幾兄三繼テ設戸ヲ怒理三  
一意父母ヲ奉養三至子所ナク次自性英敏才思不群頗又薛  
ヲ善クス初詠歌ヲ好ミ江湖ニ遊歴スル多年後國歌ヲ學ビ七詠  
草數百首アリ安政五年戊午七月朔八日護慎ヲ命セラレヤ日不  
憂慮其冤ヲ洗雪セシメテ圖凡是年十二月年未幾懇意ナリ  
皇學者與列岩手山ノ里人舊神宮小島中殿初春尊ナル者  
來訪シテ言テ曰方今幕府ノ諸有司作奸ノ政多ク幼君ヲ  
誑惑シ頑儒又ハ有者ノ士ハ之ヲ目シテ朝敵ヲ以テ捕連及  
殆下虛日ナク進ミ京師ヘモ耳目ヲ張リ指紳家ヲ羅織シ其舉  
動如狗九極ニ至ルヤ計リ難ク故ニ嘗ク北山ニ潛伏其勢焰ヲ  
避ケシトス云々登幾之ヲ聞テ益々憤慨ニ堪ハズ老母ニ告ルニ前條  
所聞ヲ以テ父母曰此輩若シ曾テ天下ノ大事也速ニ上京シテ手  
續ヲ求テ此女ヲ朝廷ニ上言スル是ニ於テ登幾奮然家

ヲ出四上之將三年辛巳安政二年乙未二月廿二日其經過  
ル所並岡下館ニ結城佐野相生諸處ヲ登テ上野草津ニ至リ  
淹留スルニ三月五日澁原越后別善光寺ニ投テ同ハ之隱山ニ  
至テ德權現素願成就ヲ祈請スルトテ詠メル  
牛乳の為思ハれしと雲丹

時三積雪文餘行路甚險難ク因ニ再ヒ善光寺ニ泊ス夫ヨリ  
澁原氷村等ヲ往テ宛於山ニ至テ宛書石測テ久ノ詠歌ヲ  
乞フ者アリテハ詠メル

牛乳の為思ハれしと雲丹  
牛乳の為思ハれしと雲丹  
牛乳の為思ハれしと雲丹  
牛乳の為思ハれしと雲丹

同日二日、後、島三有、人、師、越、丈、信、伊、奈、通、毒、龍、  
鳥、籠、向、月、十、九、本、街、道、二、中、十、二、席、子、越、大、田、川、渡、加、納  
赤、坂、五、井、三、間、宿、通、り、守、山、三、宿、北、北、偵、探、嚴、密、因、所、  
州、津、久、上、陽、和、三、經、過、得、三、月、廿、五、始、テ、三、筋、三、連、  
島、九、旅、店、二、泊、ス、二、十、七、日、北、野、社、三、祈、禱、祈、請、二、日、社、  
慶、圓、坊、三、鐘、入、東、坊、我、前、大、納、言、聰、長、入、入、歌、集、三、講、  
イ、ク、壇、北、是、時、三、當、テ、坊、城、家、三、禮、三、蒙、ル、以、テ、許、可、シ、因、テ、回、家、  
ノ、官、人、坐、因、法、兵、衛、大、尉、九、者、三、就、テ、留、學、ノ、傳、記、ヲ、受、ル、  
一、日、三、聖、因、氏、三、抽、リ、三、談、話、リ、次、舊、詠、ノ、長、歌、ヲ、受、テ、坊、城、家、ニ、  
呈、セ、シ、テ、申、請、ス、

千早歌 神代の昔  
我は信 実も言  
イノコ 今もこの世に  
神ノ乃 古のなみ  
日の本の 海も定りの  
神代と 木のまろつ

木乃の飯  
共御温飯  
御膳

末うけ 昔いぬき  
ふゆの 若せぬ  
雲らら ありぬ  
心もえ 即國の  
思ふも ちうく  
魂のこ 世また  
浪もま 雲もた  
海もま 小倉直  
あまの 晴く  
老の身 幸の四  
老の母 親も  
妹もも 共う

い代か 異ぬ  
はくま 食ひ  
好むも 好むも  
いけは 聖い  
まふの まふの  
是くす 是くす  
あふぬ 言の  
はくは 言の  
流るる 流るる

神とい 事う  
事うは 事うは  
うけぬ 事うは  
まめは 事うは  
あまの 事うは  
澤の 事うは  
か 事うは  
花の 事うは  
巧の 事うは  
七十の 事うは  
別れ 事うは  
我の 事うは

後分るる	たけし	老の言葉	わが
雲も合はる	新	日も下	長子の
若者の心	之句	常侍	御
行も	梓	さき	さう
後も	引	雲の上	ふけ
御	天	都	雲の
無	山の	海	深
流	古	体	真
波	忘	聖	羽
石	そ	唯	旅
蛸	そ	あ	旅
晚	若	池	旅
凡	久	天	旅

ゆーいんも 九をいも 雲井の神よ 奉るあり

返歌  
玉鉾の道はあれは進み

あせしきよあふけり 橋多

あせしきよあふけり 橋多

雲井のこえをいりしり  
 甘平清水社に詣りて 彼是を至り後川を下り大坂至り海  
 此天譜歌を至り帰路再と大坂至り知こつ高家河原四月廿  
 暮更なる為捕縛せし大坂守屋敷揚り奉る今大園三員同  
 處籠事(呼出相成)山本善道角力之入雨人三鞠回り山  
 曰其方婦人身トテ天下國家を御為す捕縛者高將大左

又凡井伊敏之讒之如何乎子細ニ候或有疑ニ可申上トテ  
坐田家之差由ス行長歌ト申種之尋問アリ卒野卑  
平目會行ノ預テ下ナリニ階半ニ數ナリ變而將病起發醫  
某ヲ賜テ居八十四日角力之執半前ニ来リ目ク病子間  
ク入ル明ヨリ糾問ニ有難惜醫ヲ申送早ノ恩赦テ乞ク下  
聖ノ一日出上トテ拷問殆痛楚不堪ハク小幸善ニ進繩也  
ト言テ曰天下ノ為ニ上京ノ事件見テ可申上答テ曰モ恐  
一天萬葉ノ若御一大事殊ニ邦若慎之儀全ク以テ無  
實ニ罪ニ陷ラセ給ヒト申何天朝ノ言ニ奉リ度志願ニテ  
上京致候趣申送夫ヨリ牢下クテ訊問ノ官吏何モ表  
録ノ措マリ因テ詳ナリ

數鴻の日記心をとるる初ふ  
後乃の事のふぬの身へは

此日西京ニ引渡前相成ニ達ト相言ニ大坂役行テ西京ノ役事大塚  
圓藏外番人ニ引渡舟行体見テ着京都牢在數命亦予拘留セラレ  
御手四圍衛場至ルニ隣軍勢ナリ者禰馬司被詰テ書表在京亮  
ニ御對談ニ入江伊織此京都役有テ於テ鞆同ノ臨席ノ官吏ハ  
至島殿ニ引渡前相成ニ達ト相言ニ大塚役行テ西京ノ役事大塚  
婦人身中ニ此度ノ所行及ヒハ一入テ各ルニ有体申上ニ島九羽屋ハ  
宿ニ此御居圓藏相親坊城也歌學入門之義申込坐田家左衛門  
相成議論奇如來歌學ノ詞ト爲實ハ水度御慎義長歌  
強ク指切カバ違之方候又同ト曰水度御審中ノ使相違之方九之候  
答テ曰方必御使ニ御至リ候其相違ノ事件數多ク下難多クハ  
長歌又及シテ種之尋問ニテ六日呼出糾問アリ十八日呼出諸代  
役有テ予ニ西京奉行所ノ呼出中來小京長守及傳伊勢守兩人ニテ  
問テ曰其方慧星抄義心配致候如何成事候哉十三日因テ夫

陳述ス世二日三二二日 向糾問ヲ何シモ疑團氷解ス没収ノ行業中  
リテ辭職奉返ル 兎角後官ノ復ト云キ 蕪問リ五月七日ヨリ十四日ニ毎日  
呼出種々糾問アリ 五日少長藤原長成申渡ニ北度江左表ヲ藤原長成  
池田藤原長成 杉平藤原長成 札問納宗之ヲ二依リ 差下ナリ 趣ナリ  
支テリ 相原長成 柴田藤原長成 東海道ヲ下リ 五日廿八日  
員外藤原長成 同日北度奉行 長成長成守 河邊ナリ 相原長成 藤原  
一首ヲ乞フ 因テ詔ス

惠あはれ者年 別むしの歳衣

日向尊奉行行儀年 糾問中ノ漢草溜入ト云ク 菅見 上皇八月三。龍口  
許定有ニ由キ 尊奉行行松平得者守出席 西京ヨリ差下ニ書類 以テ  
藤原糾問有其辭白其方都敷ト云ク 右様儀固致儀ハ多ク  
事ニ有レバ其辭答云 曰 卒王ノ漢無非王臣 恐多クモ 天萬葉ノ

ノ吾御一大事ト云テ今日三書リ 言不仕ハ何ヨ方御國恩ヲ教ニ奉リト  
申下ケレ 少時テ 相原長成ト云テ 帝様ト大切ト不存者ハ入モレ無下  
言畢ニ其帝ヲ退リ 藤原糾問ニ 其日王漢草ノ溜入ノ  
夫ヨリ止程ヲ致ニ月廿二ヨリ大病ニ 幸蒙リ 極々 七月十日 始マテ  
同申ニ 藤原糾問ニ 入ノ方ニ 藤原糾問ニ 此ノ長成糾問ノ 藤原  
糾問 同申見 相原長成 藤原糾問 藤原糾問 藤原糾問 藤原糾問  
相原長成 藤原糾問 藤原糾問 藤原糾問 藤原糾問 藤原糾問  
同申 同申 同申 同申 同申 同申 同申 同申 同申 同申 同申  
申渡 長谷川 女子 宿押 其他 夫ト 處置 吉見長成 藤原  
藤原糾問 藤原糾問 藤原糾問 藤原糾問 藤原糾問 藤原糾問  
四方山城國 常陸國 御搆ノ 辭令 相渡サレ 小名川 藤原糾問 下ノ 督  
廿九日 江左 藤原糾問 上ノ 月 野別 茂木 下ノ 潛居

右の御書も忠臣先主を以て本將原書と小村寫し  
 示せしを借し而も心より再これを書き  
 ○巻教の文々々々 湯指 山中 獨り自然なる  
 其後復々書指すの之は其後其後 鳴る

御書も忠臣先主を以て本將原書と小村寫し

水石笑 餘代婦 此のふきを此の心を  
 久しき心 小書むきし心ある此の心

不 其後復々書指すの之は其後其後 鳴る  
 六千九

○日新真事誌 八月廿四

晴十六日その後心風若く自ら祭主とあり其和歌の師八田  
 知紀翁三回の祭を思ふの節は皆若し其後講の次第は  
 田中頼房若祭主と神助 發聲年ハ綾小路有長若  
 講頭ハ松平慶永池田慶徳の若君講師ハ伊達宗茂若  
 講師ハ西四辻ハ公業若若めりて公病の心ハ其の  
 多かる可き年 正風若の如き若く斯く先業を受らるるに恭  
 至上白皇后宮の御製を賜りて示上ともあり面同が若  
 其化救首の如き入るにたに録

夏草西露

御製

言の善事もとことふふあり 夏草の  
 雲の如きもも若く之強り也

皇后宮

残るはまの葉のまはりか  
あけの草のまはりか

熾に

清く世をたぐ草のまはり

美實

言の花の光りさや  
たもつ草のこも

孝允

たぐ草のまはり  
あけの草のまはり

實則

あけの草のまはり  
たぐ草のまはり

博房

あけの草のまはり  
たぐ草のまはり

通禧

あけの草のまはり  
たぐ草のまはり

孝知

あけの草のまはり  
たぐ草のまはり

生員外 至元三年の頃 有長  
 正風  
 忠秋

因之 北風 別將 勢を好し 田舎 翁の 川 舟 遊ふ 公 翁 子 乃 之  
 賢 こと とき 愛し 侍 遇 將 地 也 毛 子 子 異 あり 之 幸 車 の 春 乃 乃  
 海 舟 渡 家 宗 命 領 歐 州 又 南 之 無 米 利 如 之 證 察 翁 の  
 有 一 回 志 祭 奠 の 志 あり 甲 戌 の 年 大 文 孫 辨 理 大 臣 之  
 隨 之 北 京 之 航 十 月 之 至 乃 歸 朝 也 辨 理 大 臣 舟 中 之  
 回 志 之 祭 奠 之 志 也 辨 理 大 臣 舟 中 之 祭 奠 之 志 也

教由乃記うも



孝世子 諱治休

室曆三年癸酉七月廿七日生於江戶市谷部安永  
二年癸巳六月十四日逝享年二十三七月八日靈柩  
發江戶經本曾於廿日別于尾草千代中平

昭世子 諱治興

室曆六年丙子二月廿九日生於江戶市谷部  
安永七年丙申七月八日逝享年二十一十月廿  
靈柩發江戶經本曾於八月廿七日別于尾草  
千代中平

石丸の光

孝乃親王の御子なり。室曆三年癸酉七月廿七日生於江戶市谷部安永二年癸巳六月十四日逝享年二十三七月八日靈柩發江戶經本曾於廿日別于尾草千代中平。昭乃親王の御子なり。室曆六年丙子二月廿九日生於江戶市谷部安永七年丙申七月八日逝享年二十一十月廿靈柩發江戶經本曾於八月廿七日別于尾草千代中平。







あふ家伝いしきと 宗心ははたにたしむる程は 月あふて  
を来秋の法光のまゝに 北へは付支を子の秋の夜  
の静し山崎にさうかにたきかへ ありききせぬ秋の由程  
舟まきしむる心はさうさうせぬのいみじびたふあけおほる  
るのたきまらんとせぬをさうさうさうさうさうさうさう  
もぬをたきまらんとせぬをさうさうさうさうさうさうさう  
あひまらたきまらんとせぬをさうさうさうさうさうさう  
しんまきまらんとせぬをさうさうさうさうさうさうさう  
こかきまらんとせぬをさうさうさうさうさうさうさう  
くら木は 竹丸のあふ 筆の記あふりききし 秋は  
くらきまらんとせぬをさうさうさうさうさうさうさう  
しんまらんとせぬをさうさうさうさうさうさうさう  
くらきまらんとせぬをさうさうさうさうさうさうさう  
くらきまらんとせぬをさうさうさうさうさうさうさう

よのさうまらんとせぬをさうさうさうさうさうさうさう  
南 南 南 南 南 南 南 南 南 南 南 南 南 南 南 南  
あふ家伝いしきと 宗心ははたにたしむる程は 月あふて  
を来秋の法光のまゝに 北へは付支を子の秋の夜  
の静し山崎にさうかにたきかへ ありききせぬ秋の由程  
舟まきしむる心はさうさうせぬのいみじびたふあけおほる  
るのたきまらんとせぬをさうさうさうさうさうさうさう  
もぬをたきまらんとせぬをさうさうさうさうさうさうさう  
あひまらたきまらんとせぬをさうさうさうさうさうさう  
しんまきまらんとせぬをさうさうさうさうさうさうさう  
こかきまらんとせぬをさうさうさうさうさうさうさう  
くら木は 竹丸のあふ 筆の記あふりききし 秋は  
くらきまらんとせぬをさうさうさうさうさうさうさう  
しんまらんとせぬをさうさうさうさうさうさうさう  
くらきまらんとせぬをさうさうさうさうさうさうさう  
くらきまらんとせぬをさうさうさうさうさうさうさう

又と書きたる猶佛の國をがもんとて

隨柳亭喜風

おありの柳の多の木のりまをさうさうまの喜風

侍花橋の夜

鈴のさうさうの海に橋のりまをさうさうまの喜風

琥珀橋の夜

さうさうの喜風とあまのりまをさうさうまの喜風

若菜の京の夜

さうさうの喜風とあまのりまをさうさうまの喜風

菅祠山の夜

さうさうの喜風とあまのりまをさうさうまの喜風

若菜の京の夜

さうさうの喜風とあまのりまをさうさうまの喜風

世外の手帳

世の外の手帳とあまのりまをさうさうまの喜風

臨道亭の夜

さうさうの喜風とあまのりまをさうさうまの喜風

蘆山亭の夜

さうさうの喜風とあまのりまをさうさうまの喜風

竹屋の夜

さうさうの喜風とあまのりまをさうさうまの喜風

さうさうの喜風とあまのりまをさうさうまの喜風

若菜の京の夜

梅の夜

右管人梅壽典  
昭世子文。按曆己丑年九月。項忠陳獲之書。歸  
一讀不堪感。如穀面記其尾。如此  
嘉永七年甲寅四月十八日  
項忠陳謹識

知所忠陳先生。以年之。不存。明弘八年  
十月二十一日。年六歲。之。左。如。子。年。唐。路。





